
eyes on me

DOGOON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

e y e s o n m e

【Nコード】

N 1 6 7 3 A

【作者名】

D O G G O O N

【あらすじ】

目の見えない少女「冬野緋奈」と、かつこいい少年「工藤良介」と、小学生の頃から良介のことを想っていた「楠木空」と友人達が繰り広げるラブコメです。緋奈と空…良介はいったいどちらを選ぶのでしょうか？

プロローグ（前書き）

工藤 良介 高2
冬野 緋奈 中2

ブログ

eyes on me

「もう一度、良ちゃんを・・・見たい」

これは俺、良介と幼なじみの「冬野緋奈」の話。

「あきらめるなって、もう一回俺を見るんだろ？」

緋奈は俺より4つも下なのに大人っぽいし、やさしいし、気が利くし・・・

「あはは！なにそれっ！良ちゃんおかしー！」

でも緋奈は今

“目が見えない”

「一緒に歩きたいな・・・」

小5のある朝、起きたときに目を開けてもその目に光は入ってこなかった。

「おいどうした緋奈・・・？」

生まれたときから緋奈は目が悪かったらしい。

「良ちゃん！良ちゃん！・・・えへへー」

それから三年。緋奈はずっと入院している。

「私、目見えないけど良ちゃんのことは誰よりも・・・」

緋奈は年ごろの女の子ができるような事が何一つできない。確かにそれは仕方がないかもしれない。

「だって私・・・私・・・」

そんな緋奈に幼なじみとして何をしてやれるのか。そんなことをずっと考えていた。

「私だって・・・その・・・女の子だしさ」

俺には緋奈の病気を治すことはできない。

「おー、それ可愛いじゃん似合ってる似合ってる」

だけど緋奈のそばにいることだけはできる。

「夏祭り行かないか？」

最近になってそんなことに気付いた。

季節は今、夏真っ盛り。

今年の夏は俺にとっても緋奈にとっても何かいいことが起ってほしい。と思う。

そして今日も、俺は緋奈の待つ病室に足を運ぶのだった。

「緋奈ー来たぞー」

「待ってたよー良ちゃん！」

プロローグ（後書き）

どうも！DOGGOONです。

え？なにになに？「みゅうじっく！」の方はどうした？

少し休業（汗

もう一回構成を練り直しているのではしお待ちを・・・

では、この作品の題名「eyes on me」ですが、ある歌手の歌の題名パクっちゃってます。（それっていいの！？誰か教えて！？）

探してみると、案外おもしろいかも。有名なゲームの主題歌になってますよ。

では、第一話をお楽しみに・・・

緋奈の誘い、京の誘い（前書き）

「・・・良ちゃんと行きたいなーと思って」

「・・・よかったら夏祭り一緒に行ってもらえませんか？」

緋奈の誘い、京の誘い

俺は工藤良介。ただ今高校二年生で成績は中の上。運動は結構できるほうだと思ってる。

ルックスは友達いわく「お前が女子の間でなんて呼ばれてるか知らないだろ？ いまどきどうかと思うが“王子様”だぞ？」ということを言われた。

この学校は中高同じ校舎で、進学はエスカレーター式である。

下の学年や中学生の女子とすれ違ったりすると、後ろできゃーきやー聞こえてきたりすることはよくある。

ほかにもかつこいいやつはいると思うが・・・

それはそうと、俺は部活に入っていない。それに、ここはそんなに部活に力を入れていないようで、あくまで学生の本文は勉強にある。ということを入学当初に説明された。

そんな学校の方向性なのか大学進学率は極めて高いことで有名なのだ。

まだ色々と話していないところもあるが、それは徐々に分かってくだろう。

そんなことを考えているうちに俺は「冬野緋奈」というネームプレートのかかった病室の前に着いた。

コン、コン、ココン

俺が来たぞ、というときのノック。四回あるうち最後の二回はココンとリズムカルに叩く。

しかし俺は相手が返事をする前に病室のドアを開けて中に入った。ベットのの上には小柄な女の子がちょこんと座っていた

病室の中は窓が開いていてカーテンが風を孕んで踊っていた。

彼女は、その風を気持ち良さそうに受け、きれいで長い髪を風になびかせながら

「待ってたよー良ちゃん」と、にっこり笑って言った。

彼女は少し年下なのだが幼なじみの、「冬野緋奈」だ。

「調子はどうだ？」

「大丈夫だよ。今日はまだ目は痛くなってるないよ」

「そうか」

緋奈は俺のほうに顔を向けて言った。

「そこら辺に椅子ない？」

俺は辺りを見回してみるが椅子はどこにもない。

「椅子なんてないぞ」

「あれ？看護婦さん片付けちゃったかな」

そういうと緋奈はベットのはしをパンパンと叩き

「ベットに座っていいよ」と言った。

俺は遠慮なく座ることにした。

「良ちゃん、手かして」

「ん？またか？」

緋奈は目が見えない。だから手を繋いでいると安心する。とかなんとかで近ごろ、よく「手をかして」と言ってくる。

「・・・いや？」

「ううん。いいよ」

俺は緋奈の差し出した手をやさしく握ってやった。

「・・・えへー」

緋奈はうれしそうだ。

俺の頬が軽く赤くなる。でも緋奈には見えないからいいけど。

「緋奈の母さんは？」

「今日は来れないって言ってた」

「そっか、忙しいんだな」

「うん何か仕事いっぱいあるみたい」

緋奈の手はあったかくやわらかい。もう片方の手は病室に入り込ん

でくる風のせいで冷たくひんやりしていて、そのせいで“手を繋いでいる”という実感をよりリアルに感じさせる。

「ねえ良ちゃん」

「ん？」

「今度夏祭りあるよね？」

「あるけどまだ二週間先だろ？それがどうした？」

緋奈は恥ずかしそうに、下を向きながら言った。

「まだ時間あるから、歩く練習してさ・・・良ちゃんと行きたいな
ーと思って」

緋奈はキュツと俺の手をさつきより強く握ってきた。

「歩く練習？普通に歩けんじゃないのか？」

緋奈の母さんから、いつもトイレとかに歩いていってると聞いたことがあったが・・・

「歩く練習は・・・いろいろあつて」

「ふーん」

「一緒に・・・行ってくれる？」

夏祭りシーズンになるといつも女子達に散々誘われ、そのたびに断ってきたが

「んー・・・行こつかな」

「え！ほんと！？」

緋奈となら行っても良いかな。と思った。

「おう、俺でよければ」

「ほんとにほんと！？」

「本当だつて」

「良ちゃんありがと！」

緋奈はさつきよりさらに強く手を握ってきた。

「えへへー。うれしいなー楽しみだなー」

なんだかとても喜んでいるようで、俺もうれしかった。

その後、俺と緋奈は長々と雑談をしていた。

しかし、緋奈は二言目には「うれしい」だの「楽しみ」だのとずっと言っていた。そんな緋奈を見ていると俺もうれしくて楽しみになってきた。

どれくらい話しただろうか

「あ．．．そろそろ面会時間終わりだね」

「ん？もうそんな時間か」

確かにもう六時半になりそうだ。俺は学生カバンを持って立ち上がった。

「今日もありがと。楽しかったよ」

「そっか。また来るよ、じゃな」

「うん。じゃね」

「．．．」

「．．．」

「．．．」

「．．．」

「．．．良ちゃんどうかした？」

「そろそろ離してほしいんだけど．．．」

「え？．．．あ！」

今まで忘れてたようで、やっと手を離してくれた。

緋奈は顔を真っ赤にして

「ごめんー」

と言った。

「今度こそじゃあな」

「うんじゃねー」

俺は病室から出るときに緋奈のほうを振り返った。緋奈は相変わらず顔を赤くして、軽く手を振っている。

俺が来たときから開きっぱなしの窓は風の入り口となり、さっきと同じようにカーテンを揺らし、緋奈の髪をなびかせていた。

それを見た後、俺は病室から出てドアを閉めた。

緋奈の病室を訪れて一週間と五日が過ぎ、もうすぐ夏祭りだ。そんなある日の放課後。

「おい“王子様”！」

「まったく、その呼び方いやなのに」

「何だよ麻弥、何か用か？」

こいつは俺の友達の「坂原麻弥」（サカハラマヤ）。

性別は男で、いつも俺達はテストの点数、体育の授業で競り合っている。でも結果はいつも同じくらい。

どっちが女にモテるか、と聞かれてもこれまた同じくらいなのだ。そんな似たもの同士なのだが結構仲良やっている。

「今日も緋奈ちゃんのところに行くのか？」

「緋奈のことも一応話してある。目が見えないということも。」

「いや、今週は行けない」

今週は目の検査が色々あるらしいので会うことができなかった。

「じゃあ王子様、今日の予定は？」

「特にないけど、どこか行きたいのか？」

「欲しいCDあるんだけど」

「うし、じゃそれ買いに行こう」

「やった！それでは王子様さっそく行きますか」

俺と麻弥は昇降口のほうへ歩いていった。俺と麻弥が歩いているとずいぶん女子にじろじろ見られている気がする。

そんなとき

「あ……」

と後ろから声をかけられた。

「良介先輩ですよね？」

ん？俺？見たことない子だけどなんだろう？

「俺が良介だけど何か用事？」

「私一つ下の学年の京といいます」

なかなか可愛い子だな。と隣の麻弥が耳元で言ってきた。

「私ずいぶん前から先輩のことが・・・気になってて」

そこで彼女は恥ずかしそうにうつむきながら

「・・・よかったら夏祭り一緒に行ってもらえませんか？」

おいおい、モテモテだな王子様よ、と隣の麻弥が再び耳元でささやいた。

「うーん、ごめんね。もう行く人決まってるんだ」

「・・・やっぱりそうですよね・・・すみませんでした」

がっかりしたような表情の彼女は、ぺこりと頭を下げて走り去っていった。少しいつてしまった。少し惜しいことをしたかも。

「さて、行こうか麻弥」

俺たちはまた歩きだした。

昇降口で口を履き替え、校舎をでた。この学校は昇降口と校門の距離が五十メートルはあって、そのまわりにはずいぶんとでかい木がたくさんある。

その種類はさまざまで春は桜が満開になり、夏は木々が涼しい木陰を作り、秋は葉が紅葉して美しい風景を見せる。冬は殺風景だが・

・
この五十メートルは四季折々の風景を見られる。俺はこの五十メートルがけっこう好きだ。

今は夏なので涼しい木陰が風で左右にゆれている。

「なあ、お前夏祭り誰と行くんだ？」

そこの木陰で座って休んでいきたいなーと思っていたところにそんな質問をされた。

「言ってなかったっけか？ 緋奈だよ、緋奈」

「え？ 緋奈ちゃんと行くのか？ つつーか大丈夫なのか？」

「うん大丈夫らしいぞ」

緋奈が何度も言っていた。大丈夫って。

「いったいその自信はどこから・・・」

「だよなあ、俺も正直いうと不安なんだよ」

「まあなんかあったら呼んでくれ飛んでくよ」

「わかった、なんかあったときはよろしく」

この時、俺の好きな五十メートルのゴール地点である校門をくぐりぬけて、俺たち二人は次のゴールであるCDショップに向けて歩きだした。

夏祭りまであと二日・・・多少の不安が俺の胸をかすめていた。

緋奈の誘い、京の誘い（後書き）

読んでくださり有難うございまっす。

いきなり関係ない話ですが、いっつも題名付けるときに悩んでいます。

今回の題名の後半「京の誘い」ですが、ホントは京っていう名前の女の子はいませんでした。可愛い女の子としか最初は標記してませんでした。でも、題名付けるときに可愛い女の子の・・・っていうと長ったらしいので仕方が無く京という名前をつけちゃいました。

おそらく、もう彼女に出番はありません（爆

もしも、もう一回出して欲しいという方はメッセージ送って下され。もし5通 超えたら出そうか ホトトギス。（ワケワカラン

で、今後の展開はというと、緋奈との夏祭りは二、三話先になりそうです。それまでもう一人主要人物を出さないといけないので・

・

今回の話の結構重要キャラです。麻弥の比にならないくらい（爆それはそうと実はですね、麻弥というキャラは・・・っと、この話は次の話の後書きで書こうっと（笑

それでは、今回はこの辺で・・・

読んでくれた方は是非感想下さいなー。一言でよろしいのでーそうすれば作業がペースアップ！して早く次の読めるかもよー・・・

公園で「カ・コーラ（前書き）」

「私には、かつこよく見えたよ」

公園でコカ・コーラ

「あー、早く家で聞きたい！」

あの後俺達はゴール地点のCDショップに着き、CDを買った。今はその帰り道だ。

麻弥は買ったCDを早く聴きたいためか、歩くスピードがいつもよりずいぶん速い。

俺はついていけず

「先に帰っていいぞ」

と言ってしまった。

「まじ！じゃ帰るわ！じゃな！」

麻弥はドッピューンと音がしそうなくらいの速さで走り去っていった。

「・・・静かだ」

俺は歩くスピードを減速し、ゆっくり歩いていくことにした。

今歩いている道路はあまり車が通らず、わりかし静かなところなのだ。

俺は静かなところを一人で歩いているときの、心が落ち着くような感じがなんとも好きだ。

後、人がいない公園っていうのも、なかなかいい。

とつても心が落ち着く。

「お、ラッキー」

通りがかった公園の中を覗いてみると誰もいない。

あそこの自販でペプシでも買ってベンチに座って飲もう。

しかし自販にはペプシは売っていなく、仕方がないのでコカ・コーラで我慢することにした。

チャリンチャリン

ピッ

ゴトッ

俺は出てきたコーラを持ってベンチに座った。
プシッ

ゴク・・・ゴク・・・ゴク・・・
「ッアー」

渴いた喉にコーラの刺激が気持ちいい。

あー・・・落ち着く・・・

この公園に、ただなんとなく来てみたのはいいが特に何もすることがないので、しばらく景色を眺めていた。

小さかったときはよくここに来て遊んだなー。かくれんぼとか鬼ごっことかサッカーとか・・・

この公園にはたくさんさんの思い出がある。

他にどんなこととして遊んだっけ・・・

どんどん昔の思い出に浸っていく俺。

ずいぶん時間が経ち、コーラもだいぶんぬるくなってしまった。しかし俺はあまり気にせずにコーラを全部飲みほした。

そんな俺はまだ昔のことを思い出していた。

「あそこで俺コケて怪我して泣いたなあ・・・」

くつくくつと一人で笑ってしまった。

すると、突然

「なーに笑ってんのよ？」

俺はびっくりして後ろを振り返った。

「げっ・・・」

そこには俺と同じ年の、フジナカソラ藤中空が立っていた。

「乙女に向かつて“げっ”とは何よ。もう」

「え・・・いや・・・その・・・」

見られたか・・・

空は俺を気にも止めずに二人ではきついであろうベンチに無理矢理座ってきた。

「もつとつめれないの？」

「これ以上は無理だ」

「もう、しょうがないわねえ」

「それはこっちの台詞だ」

「はいはい」

「たたく。」

こいつは小学校の頃の女友達である。しかし中学の入学前に転校してしまった。

それから会うことはなかったのだが、なぜかは知らないが空は俺と同じ高校を受験して、見事合格したのだ。俺はエスカレーターのおかげで受験はしなかった。

確か今はD組だった気がする。だから特に話をする機会はなかった。

「良介とき、こうやって話すの久しぶりじゃない？」

狭いベンチのせいで、いやでも肩が触れ合ってしまう。

「そうだな、同じ学校なのに話すことは少なかったもんな」

クラスの階層が違ったからだ。

・・・しかしこいつ小学の頃と比べるとずいぶん変わったなと思う。あんな顔だったのに、今はけっこう美人になっている。女って分らないな・・・

「・・・私の顔見てどうしたのよ？」

しまった。見つめてしまった。

「ん？変わったなーと思って」

「そりゃあ小学のときからすれば変わったわよ。当たり前でしょ」

「まあ、そうだけど」

OK、誤魔化し成功。

「ところで、さっき何で笑ってたのよ？危ない人に見えたわよ？」

危ない人って・・・

「昔はこの公園でよく遊んだなーと思ったら、いろんなこと思っ
てさ。そしたら・・・」

笑ってしまったんだ。

「私はあんまり覚えてないなー」

「一緒にサッカーやったりしたことあるぞ」

「そうだったけ？」

「そうだよ」

「そうだったかもね」

「そうだったんだよ」

「はいはい」

「むう・・・」

「たく、こいつは・・・」

「あの・・・さ・・・私が転校する三日くらい前のこと覚えてる？」

「いや、ぜんぜん」

さっぱり覚えていなかった。

「こういえば分かるかな？私が年上の男の子にケンカ売られちゃっ
て、どうすることもできなかったときに良介が手をひっぱって、「
逃げるッ」って私を助けてくれたときのこと」

「んー・・・」

何となくそんなことがあったような気がする。

「覚えてる？」

「あの時は恐かった。だからただ手をひっぱって逃げただけで助け
たわけじゃないと思うけど？」

確かにあの時は無我夢中で逃げたとにかく恐くて。だって三歳以上
も上の人だったんだから。

「まあただ手をひっぱってくれただけかもしれないけど・・・でも
ね、あの時手をひっぱって一緒に逃げてくれた良介は・・・」

そこまで言うとき空はベンチから立ち上がり、くるりと向きをかえて
俺のほうを見て

「私にはかつこよく見えてたよ」
と言った。そのときの空は小学校の頃と変らないあどけない笑顔だった。

少しドキツとした。

「あれ？良介顔赤いよ？もしかして・・・？」
今度はいやらしい笑みを浮かべながら言ってきた。

「んなわけねーだろ」
そう言つて俺もベンチから立ち上がり、飲み終わったコーラの空き缶で空のおでこを軽くたたいた。

ポコン

といい音が鳴った。

「いったゝい、よくもやったな！」

空は恨んでやる。という顔をしている。表情豊かなやつめ。

「罰として私を家まで送り届けることっ」

空き缶をごみ箱に放り投げた俺は、別にそれでもいいか。と思った。

「どこだよおまえん家」

「あんたん家から二十分くらいかかるところ」

「あつそ、じゃ行くか」

「えっいいの？」

「おう」

空は自分が言つたにもかかわらず、キョトンとしていた。

「空ーいくぞー」

「うん！」

公園から出るとき、ふと、空を見てみると夕日が鮮やかな紅色で辺りを照らしていた。

それはまるで、俺と空の小学校以来の再開を祝福してくれているか

のようだった。

俺は歩きながら空に話かけた。

「空」

「何？」

「またサッカーしようぜ」

「いやよそんなの」

「やろうよ」

「いーやだ」

「いいから、いつかまたやろうぜ」

「もう・・・一生言ってなさい」

「分かった、やるまで一生言ってやるからな」

そう言った時、空は少しうつむき加減で

「・・・ちゃんと一生言い続けてよ？」

と、少し恥ずかしそうに声をひそめて言った。

「言われなくても一生言ってやるよ」

「・・・うん」

夕日のせいではくは分からないが、空の顔が恥じらいで赤く染まっていたように見えた。

「??」

俺、なんか変なことでも言っただかな？

と思い空を見ていた。

「あんまり見ないでよ・・・もう」

「お、おう」

やっぱりいろんな意味で女って分かんねーな・・・。

公園でコカ・コーラ（後書き）

あい！どうも！DOGOONです。
読んでくださり感謝感謝！

今回はついに登場「空」ちゃんです。

結構愛着のあるキャラです。色々小説を書いてきたのですが、必ず空という名前のキャラを出すようにしています。今回も例外ではな
いっ！（爆）

で、今後の空ちゃんは、ぶっちゃけ緋奈の恋敵になります。

で、良介には緋奈と空のどっちをくっつけようかなー・・・と悩んでおるのです。

そっこつで！皆さんにどっちがいいか教えて欲しいです。自分はど
っちがいいかーとかこっちはいやだーとか・・・それによって今後
の内容変えていきたいと思っています。

では今回はこちら辺で・・・

次回も是非是非読んでたもれ！

可愛い金魚と青い浴衣（前書き）

「私だって・・・その・・・女の子だから」

可愛い金魚と青い浴衣

今は放課後の掃除の時間。俺は掃除に割り当たっていなかったの
で帰る準備をしていた。

いざ帰ろうとしたとき、そこに麻弥がやってきた。

「おーじさー！」

あーくそつ、麻弥のやつ！名前は普通に呼べっつーのに・・・

「・・・なんだよ？」

「今日から夏祭りだな」

そう、今夜から夏祭りが始まる。

この町の夏祭りは四日間、町で一番広い神社の境内の中で行なれ、
実に多種多様な出店が立ち並ぶ。というオーソドックスなものだ。

「ああそつだな、夏祭りだな、それが何か？」

「いや特に何も・・・何で怒ってるんだよ？」

「たいした用事じゃないのに呼ぶなよ・・・それと“王子様”はや
めろ」

「えー何でー」

「いやだから」

麻弥はしぶしぶ分かったよ、と言った。

「ところで、何時に緋奈ちゃんを迎えに行くんだ？」

「六時半ごろ」

「じゃあそれまでちよつと付き合えよ」

「悪い先着入ってる」

麻弥は心底残念そうな顔をして

「なっなんだつてー」

と言った。

「じゃ俺帰るわ。じゃーな麻弥」

「今度は付き合ってもらうからなー」

と言われたが

「考えとくー」
と曖昧に返しておいた。

俺は昇降口で靴を履き、涼しそうな木陰が無数にある五十メートルをいつもより速めに歩いた。校門で人を待たせているからだ。その人というのは、この間、公園で俺の恥ずかしい場面を目撃した「空」だ。

空は校門に背をもたれ、その自分の名前でもある空を見上げていた。

「おっす」

「お、やっと来た」

遅いぞーみたいな顔をしていた。

「仕方がないだろ最後の授業延びたんだよ」

そう言つて俺も空を見上げてみた。空には大きな入道雲が雄大に広がっていた。

「・・・私、雲が好きなんだ」

「ふーん」

「見てると飽きないよね」

しばらく空は何も言わずに雲を、空を見上げていた。

「別にいつまでも見てていいけどさ、なんか今日、用事あるんじゃないのか？」

「ああ、そうだった」

「で？用事ってなんなんだ？」

今日の用事というのは空を家まで送ったときに今日の放課後、あんなに用事があるから空けといつてと言われた。俺も用事があるから早くしてほしいのだが・・・

「今日、何の日だか知ってる？」

「夏祭り」

「違う、それ以外で」

それ以外・・・ああ

「俺の両親の結婚記念日」「へーそうなんだ・・・って全然違う！私に関係あることよ！」

違うのか・・・

「お前の両親の結婚記念日」

「それは来月」

「じゃあお前の爺さんと婆さんの・・・」

「怒るわよ？」

「ごめん」

さてはて、今日は何の日だろう？

・

・

・

・

・

さっぱり分らない。

「ごめん全然分らないんだけど・・・」

空は少しショックを受けたようだった。

「私はあんたのを覚えてるっていうのに・・・今日は私の誕生日よすっかり忘れてた。全然記憶になかった。」

「あ、そうか。覚えてなくてごめんな」

俺は素直に謝まった。

「そんなことより、何か言うことはないの？」

「誕生日おめでとう」

空は少しうれしそうにして

「ありがと」

そう言い、すぐ恥ずかしそうにしながら今度はこう言った。

「それでさ・・・プレゼントっていつちゃあ何だけど・・・夏祭り一緒に行ってくれない？」

「・・・ごめん、俺もう行く人決まってるんだ」

空は、えっ、という言葉を発したが開き直って

「なによっ、良介のくせに生意気じゃない」
と言った。

そっちは言うが、その話し方には若干がつくりしている様子が見て取れた。

「悪いな、プレゼントあげられなくて」

空は、ううん、と首を振った。

「本当は“誕生日おめでとう”を言ってほしかったただけだから、夏祭りのことはついだよ」

「ん、そうか」

「じゃ、私帰るね。バイバイ」

「おう、じゃあな」と言おうと思ったが一つ忘れてることがあったので呼び止めた。

「空、ちよつと待って」

空は帰るために振り向いたが今度は俺に向かって振り向いた。

「一つ忘れてた」

「なっ何よ・・・」

「サッカーしようぜ」

空は心底呆れたような顔をして言った。

「少しでも期待した私が馬鹿だったわ・・・じゃあね」

「おう、じゃあな」

こうして俺と空は校門をくぐりぬけ別々の道に別れていった。

「さて・・・と」

俺は自室で財布と携帯を持ち、緋奈の待つ病院に行く準備をした。
多少の不安があるものの、普段病院から出られない緋奈が久しぶりに外出するのだ。緋奈には楽しんでもらいたい。もちろん俺も楽しみたい。

しかし、頭の中は何だかぐちゃぐちゃしていた。心配だが楽しみたい。楽しみたいが心配だ・・・

病院に着いた。約束の五分前

緋奈の病室前。約束の2分前

コン、コン、ココン

いつものノック。

ガラガラ

いつものドアの開く音。

「こんばんは良ちゃん」

いつもの緋奈の声。

いつもの緋奈の病室。

いつものようにちょこんとベットに座る緋奈。

しかし緋奈はずいぶん変わっていた。

緋奈は、うすい青色で所々に小さな赤い金魚や黒い金魚がかわいらしく描かれている浴衣を着ていた。

風に美しくなびかせていた髪はうなじの少し上の辺りに一つに束ねられていた。

「えへへ、ちよっとおしやれしてみたの」

緋奈は恥ずかしそうだがうれしそうにそう言った。

俺はびっくりしてしまった。

「似合ってるかな？良ちゃん？」

「お、おう。すっげー似合ってるよ」

本当にすごく似合っていた。うまく言葉では表せないが、緋奈のイメージにぴったりだ、というか何というか・・・

むちゃくちゃ狼狽していた。

「良ちゃんこつち来て」

また緋奈はベットの隅をパンパン叩いていた。

俺はベットに座った。座ると少しは冷静さを取り戻した。

「それどうした？」

それとはもちろん浴衣のことである。

「お母さんのお下がりだよ」

「へー、サイズぴったりじゃん」

「うん」

「それ歩きにくないのか？」

緋奈は少し誇らしげに

「練習したから・・・大丈夫だよ」

歩く練習っていうのはこのことを言ってたのか・・・

「ねえ、良ちゃんは今日楽しみだった？」

「ああもちろん」

「そっか、私、すごく楽しみだったんだ」

そう言った緋奈の顔はとても幸せそうだ。

「それに浴衣も着てみたかったしね」

「色々大変じゃないのか？緋奈の場合」

「うん・・・まあそうだけど」

「無理して着なくてもよかったんじゃないのか？」

「無理しても着てみたかったんだよ」

「なんでさ？」

そこで緋奈は少し困ったように

「だって・・・その・・・私だって女の子だから・・・」

と言った。

そんな緋奈の困った顔をみて俺はついつい笑ってしまい、

「あー笑ったなー！」

と、緋奈の反感をかってしまった。

「悪い悪い、緋奈があまりにも困った顔してたからさ」

「もー」

でも、今度は二人で笑った。

こんなふうに笑っていると不思議に不安は薄れていった。

「ははは・・・と、そろそろ行かないか？」

「あ、うん、そうしようか」

俺は立ち上がり緋奈の手を取った。

「あ・・・」

「ん？手を繋がないと危ないだろ？」

「え、あ、うん」

緋奈も手を握り返してきた。

「今日は楽しもうな」

「うん！」

手を繋ぎ病室をでて、病院を出た。外に出たとたん御輿みこしの太鼓の音が遠くからだがはつきりと聞こえてきた。

「太鼓の音だね」

「ああ、御輿の太鼓の音だ」

毎年御輿もやっていることをすっかり忘れていた。

俺たちはその御輿の音に向かって歩いていった。

「楽しみだね、良ちゃん」「ああ」

その時の緋奈の笑顔と太鼓の音を聞いたときには不安はすっかりなくなり、俺もいつのまにか笑顔になっていた。

今夜は楽しい夏祭りになるだろう。そんな気がする。

可愛い金魚と青い浴衣（後書き）

はいどうも！DOGGOONです。

今回も読んで頂き有難うございます。

ついに緋奈と夏祭りに向かうことになりました。

今回はeyes on me in夏祭りをお送り致します。（爆）

今回は後書きをさらっとまとめてみました。それでは！また次の話で会いましょう！

年下の小さな幼なじみ（前書き）

「私・・・一生・・・」

年下の小さな幼なじみ

太鼓の音に導かれて、夏祭りの会場である神社に着いた俺と緋奈。

太鼓の音もすごいが、人の声も負けてはいないくらいのがわめきだ。

「何だか、人いっぱいだね。熱気がすごいよ」

確かに神社は人でごった返しになっていた。

緋奈は暑そうに手を顔の前でたばたさせていた。

「いいか緋奈、絶対に手を離すなよ」

「うん、わかった」

そう言っただけで緋奈はキュッと手に力を入れた。

俺はこの小さな暖かい手を離すことはしないように、と心に決めた。

「さて、緋奈は何をしたい？」

すると、緋奈は今まで考えていなかったらしく少し考えてから、たこ焼きが食べたい。と言った。

「うっし。じゃあこのたこ焼き博士がうまいたこ焼きを探してしんぜよう」

「ええ！良ちゃんってたこ焼き博士だったの！？」

実は俺、たこ焼きが大好きだったりするのだ。

「おう！たこ焼きには少しうるさいぞ」

「じゃあ博士、おいしいたこ焼きを私に食べさせてください」

「了解した」

こうして俺と緋奈の夏祭りが始まった。

「ここだな」

あの慣れた手つき、目にもとまらない手の返し、さらに中に入っていく、タコの絶妙な大きさ、そして何よりたこ焼きをつくるときの目の輝やき。

間違いない。この人のつくるたこ焼きは極上にうまい。

「すみません、一つお願いします」

俺がオーダーすると、あいよっ！と威勢のいい声をだしてパックに八つつめてくれた。

「いくらですか？」

と言うと

「お兄ちゃん、かわいい彼女もってるねー！」

「え、あのー・・・」

彼女じゃねーつつの

「それにかっこいい彼氏だな！可愛い彼女さん」

そこで否定をすればいいものを緋奈は

「えへへー」

とうれしそうに笑った。

「よし、このたこ焼きはただであげちゃおう！」

「え！まじっすか？」

「おうよ！可愛い姉ちゃんにかっこいい兄ちゃん、これは俺の気持ちだ、持ってけ！」

と言うので俺は遠慮なくもらうことにした。

「ありがとうございます」

「なーに、気にするな！これから仲良くな！」

たこ焼きのオヤジには色々と誤解されたがまあいいとしよう。

俺と緋奈はそこら辺にあったベンチに座ってたこ焼きを食べることにした。

たこ焼きの入ったパックの蓋を開けると、ソースの香ばしいにおいがあふれだした。

「緋奈、すっげーうまそーだぞ」

「うん、いいにおいがする」

俺はついてきたつまようじを一つ刺して緋奈の口元にもっていった。それが分かったようで緋奈は口を開けてたこ焼きを食べた。つづいて、俺も食べてみた。

俺の目に狂いはなかった。極上にうまい。

「良ちゃんすつこいおいしいよ、さすが博士だね」

「ふっ、まあな」

「良ちゃんもう一個」

「いいけど、一人四つずつだからな」

「えー少ないよー」

「半分ずつなんだから文句言わない」

俺は半ば無理矢理緋奈の口にたこ焼きを突っ込んだ。

「むーむー!」

「文句言うから口をふさいだんだよ」

その後、俺たちはたこ焼きをあつという間にたいらげた。

たこ焼きを食べてから一応境内を一周して遊んだ。緋奈の左手には戦利品の水ヨーヨーがぶらさがっていた。

「良ちゃん次はどこにいくのか？」

「うーん・・・そうだスーパーボール掬いに行こう」

「うん、そうしょー」

俺は目の前にあったスーパーボール掬いの出店の前に緋奈としゃがみこんだ。

「すみません、一回やらせてください」

そう言っただけで俺は出店の人に二百円をだした。

「はいどうぞ」

俺は差し出された小さなおたまを取り、目の前に狙っているボールが来るのを待った。そのボールはきれいなスケルトンブルーを

していて、普通のより少し大きい感じのものだ。

来た。

俺はそれだけを狙っていた。

結果は他のボールも二、三個混ざったが無事にターゲットの捕獲に成功した。

出店の人に小さなビニールの袋にいらしてもらい、俺たちはその店をあとにした。「そのスーパースポーツボールどうするの?」

「んー? 友達へのプレゼント」

「ふーん、もしかして女の子?」

「違うって」

「・・・」

「どうした?」

「うっん、なんでもない」

「そうか? そうならいいけど」

でも、緋奈の顔は不満たっぷりの顔をしていた。うーむ変な勘違いをしているようだ・・・

スーパースポーツボールを取った後、何気なく神社の本堂にやってきた。

「良ちゃん、少し疲れちゃった。どっかで休もうよ」

と緋奈が言うので俺は本堂の裏につれていき、少し地面より高い縁側に緋奈を座らせた。

「ここはだいぶ静かだな」

静かといっても周りの喧騒は十分聞こえていた。

「うん・・・」

俺も緋奈の隣に座った。

ここなら別に手を離してもよいと思い、手を離そうとしたとき「ここでも手は・・・繋いでほしい・・・な」

と、言ったので

「わかった」

俺は手を握りなおした。

この後、なぜか緋奈は急に黙りこくってしまった。

何分たっただろうか？

緋奈はずっと何もしゃべらなかった。そして俺も何もしゃべらなかった。そんな雰囲気がつつと続いていた。さっきまでの楽しい雰囲気はどこへ行ったのだろうか？

緋奈は時折、繋いでいる手に力が入れたかと思うとすぐに力を抜く。それを繰り返していた。

その動きはまるで何かを伝えようとしているようだった。

何回繰り返しただろうか？その時、沈黙を破ったのは緋奈だった。

「あのね良ちゃん・・・私良ちゃんに言っておきたいことがあるの・・・」

そこで緋奈は人呼吸おいて

「五日後・・・私、手術することになったの」

「・・・目だよな？」

「うん・・・もしかしたら見えるようになるかもしれないんだって・・・それって！まじかよ！

俺は最高にうれしかった、だが次の瞬間

「でも、確立は・・・失敗するほうが大きいの」

俺はがっくりしてしまった。

「うん・・・後は？」

緋奈を促した。緋奈は言いたくないかもしれないが、俺は知りたか

った。何か俺にもできることがあれば、と思ったから。

「うん・・・それで・・・それで、もしだめだったら、私、一生・・・」

そこまで緋奈は言葉を切った。その先は言いたくなかったろうし、言わなくてもそんなことは想像がついた。

「本当はね、こんな時に言いたくなかったんだけど・・・このチャンスを逃せば、きっと、ずっと言えないと思って」

「聞けて・・・よかったよ」

もつと気の利いた言葉を、もつと励ましの言葉を言いたかった。でも・・・言えなかった。

「・・・」

俺たちは沈黙していた。

もし、手術が失敗したら、そんなことばかりを考えてしまう。それは緋奈も同じだろう。

いつのまにか太鼓の体に響く音が消え、人気もなくなってきた。しかし、俺たちは何もしゃべらず、ただお互いの手を握り合っていた。

何分たっただろうか？

緋奈が急に繋いでいた手に力をいれた。

俺は横にいる緋奈を見た。

「緋奈？どうし・・・」

最後に入るはずの「た」は言うことができなかった。

緋奈は泣いていた。

その閉じられたまぶたから、大粒の涙がこぼれ落ちていた。手で拭いても拭いきれないほどにぼろぼろと、涙はとどまることなく落ち続けた。

緋奈の肩が小さく上下している。必死になって嗚咽をこらえている。しかし、その嗚咽もしだいに大きくなってきた。

「・・・つく・・・ひつく」

「お、おい、大丈夫か？」

俺は繋いでいないほうの手を緋奈の膝のうえにおいた。

「大丈夫じゃないよ・・・恐いよ・・・良ちゃん」

「緋奈・・・」

緋奈は膝においた手と繋いでいた手を抱き抱えるように胸元へもっていき、ぎゅつと俺の両手を自分の両手で包み込んだ。

「もし・・・つく、だめだったら・・・私、ひつく、一生・・・」

「緋奈・・・」

「私、一生・・・なっ何にも見れない」

「緋奈・・・！」

「良ちゃんを・・・ひつく、見たいのに・・・」

緋奈のこんな泣いた姿は見たことがない。いつも目の見えないことなんて気にしてないかのように振る舞っていた緋奈。そんな緋奈がいつもより小さく見えた。

同い年のように俺といつも話していたのに、今、目の前にいる緋奈は、年下のようなだった。

「良ちゃん・・・良ちゃん」

震える声で俺の名前を呼び続ける、年下の、緋奈。

肩を上下にゆらしながら、大粒の涙を流している、小さな、緋奈。

その光の入ってこない目の手術の結果を恐れる、幼なじみの、緋奈。

小さな緋奈。年下の緋奈。幼なじみの緋奈。

その全ての緋奈を、一人の緋奈を俺は横から、抱き締めた。

「り、良ちゃん・・・」

「・・・」

俺は何も言わずに、その華奢な体をやさしく強く抱き締めた。

「つく・・・ひつく・・・うつ・・・」

緋奈も俺に抱きつき、大声で泣きはじめた。

俺はより強く、緋奈を抱き締めた。

緋奈もそれに答えるかのように俺にしがみついて、よりいっそう声を出して泣いた。俺は緋奈の頭に片手をおき、きれいな髪をなぞるように撫でていた。

「良ちゃあん！良ちゃあん！」

緋奈は泣き止むまで俺の名前を言い続けた。その間、俺は背中をさすり、頭を撫でてやることしかできなかった。

十分ほどたって、だいぶ緋奈は泣き止んできた。

「・・・ひつく・・・つく」

「なあ、緋奈」

俺は緋奈を抱き締めたまま話かけた。

「なっ・・・何？」

「手術そんなに恐いか？」「うん・・・すつごく怖い」

「そうか・・・本当はさ、こんなこと恥ずかしくて言えないんだけど」

俺は緋奈の耳元で

「俺がついてるから安心しろ、なっ？」
と言った。

「・・・うん、わかった」そして緋奈はぎゅっと俺にしがみついて
「ありがとう良ちゃん」
と、ささやいた。

恥ずかしいことを言って数分がたった。

完全に泣き止んだ緋奈は、俺から離れた。

「・・・もう、いいか？」

「うん。大丈夫。ありがとう」

再び手を繋ぎ、最初の状態に戻った。まだ体に緋奈のぬくもりを感じる。そのせいで繋いでいる手が熱く感じる。

「良ちゃん、そろそろ帰らない？」

「ん、そうだな、帰るか」

俺と緋奈は、神社の本堂から出て、出口に向けて歩きだした。

「あ、ちよっと待って」

緋奈が急にとまったので俺はこけそうになった。

「どうした？」

「神社におまいりしてから帰ろ？」

「ああ、そうだな」

俺たちは神社に戻って、賽銭箱に二十円を入れ、手を繋いでいるので下を向いて目をつぶり祈った。

どうか手術が成功しますように。 緋奈の目が見えますように・・・

目をあけて緋奈を見ると、俺より先に終わらせていたらしい。

「良ちゃん、帰ろう?」

「おう」

俺たちは再び病院に向かって歩きだした。いつのまにか周りには人がいなかった。それに、出店もしまっていた。

その風景は、まるで、世界に俺と緋奈の二人しかいないようだった。

緋奈の病院に着いたのは十時半くらいで、看護婦さんに軽く怒られた。遅すぎる、と。

俺たちは謝り、今日は許してもらった。ありがとう、やさしい看護婦さん。

緋奈の病室には誰もいなく、俺は緋奈と少しばかり話してから帰ることにした。

「なあ、五日後の手術って、何時からなんだ?」

「えっとね・・・午後3時ごろかな」

「その日って、俺は来ていいもんなのか?」

「うん。もちろん」

「じゃ学校終わったらすぐにくるから」

「うん、わかった」

「・・・あのさ、もう恐くないか?」

緋奈は少し戸惑ったが

「・・・ちよつと怖いよ・・・でも、良ちゃんがついててくれるから大丈夫」

と、笑顔で言った。

俺はその笑顔を見て安心した。

「そうか・・・よかった・・・俺そろそろ帰るな」

「あ、えっと・・・今日はありがとね・・・いろいろ」

「なーに、気にするな」

俺は座っていたベットから立ち上がり、病室から出ようとした。そ

の時

「あ、待って」

と緋奈に呼び止められた。

「ん？どうした？」

「もう一回・・・神社の時みたいにやってほしいな・・・」

俺は、まさかそんなこと言われるとは思ってなくて、少し動揺したが、緋奈をベットから立たせ、向かい合った。

緋奈の頬は赤らんでいた。

少しばかり体が震えているように見えた。まるで俺を待っているかのように。

俺はゆつくりと再び抱き寄せた。さっきとは違い、お互いにお互いのぬくもりを感じた。

俺たちは互いのぬくもりを充分に共有してからゆつくりと離れた。

「・・・じゃあ、俺帰るから」

「・・・ん、ありがと。良ちゃん」

「じゃな」

「うん」

俺は病室のドアを開けて外に出た。手を振っているであろう緋奈を振り返らずに、後ろ手にドアを閉めた。

病院を出て、空を見上げた。

空には昼間のような入道雲はもちろんなかったが、雄大な月と星空が広がっている。

手術が終わったら、緋奈とこんな満天の星空を見たいと、強く、強く思った。

年下の小さな幼なじみ（後書き）

どうも！DOGGOONです。

今回も読んで頂いて有難うございます！

ついに夏祭りに来ちゃった緋奈と良介。書いてることは赤面するよ
うな恥ずかしいことばかりです（爆）

書いてて恥ずかしかったですよ・・・。

で、今のところ緋奈と空のどっちとくっつけようかなアンケートは
緋奈の方が少々優勢です。これからどうなる事やら・・・。

それで次は、空が良介に・・・的な話になると思います。緋奈の話
を書いたら空の話が次にくるようによろしくと思います。その逆もま
たしかりです。

最後に忘れちゃいけないお礼の言葉。

投票してくださった皆さん。本当に有難うございます！これからも
eyes on meをよろしく願います。

どっちが勝っても投票してくださった皆さんをがっかりさせないよ
うに頑張りたいと思います。

それではまた次回会いましょう！

空の色と空の想い（前書き）

「良介……りょうすけ……りょうすけえ」

空の色と空の想い

夏祭りの次の日

「ふあゝむ」

今は一時間目の授業中。

結局昨日家に着いたのは十一時を少し過ぎていた。母さんは怒ったりせずに、緋奈ちゃん楽しんでたかい？とだけ聞いた。ああ、楽しんでたよ、と答えた。その後俺は風呂に入り、すぐに布団にもぐったが、

緋奈の手の感触、

緋奈のぬくもり、

緋奈の泣いた顔、

緋奈の体の感触、

緋奈の・・・

とにかく緋奈のことが頭から離れなかった。

俺は緋奈のことを好きに・・・？

みたいなことも考えてしまったが、それはあいつの今までみたことのない姿を見てしまったから、そういう幻想に陥ってしまったのだと、自分を納得させた。

・・・理由としては曖昧だけど

しかし俺は、無理矢理納得し、ほてった体に無理矢理布団をかぶせて、無理矢理寝ようとした。だが、結局最後に時計を見たのは午前三時になってしまった。

そして今に至る。

だから今の俺は猛烈に眠い。大好きな世界史なのに俺は立ち向かってくる睡魔に勝てそうになかった。先生の説明が子守歌に聞こえてくる。

ああだめだ、寝てしまう・・・

寝ちゃダメだ寝ちゃダメだ寝ちゃダメだ寝ちゃダメ・・・メ・・・ぐう。

「Z Z Z・・・」

先生ごめんなさい。僕寝ます。

「Z Z Z・・・」

世界史が始まって十六分後、俺は夢の世界へ飛び込んだ。俺はこの授業中に目覚めることはなかった。

はっ！

目が覚めた・・・！いついま、何時間目だ！？

黒板に向かって字を書いているのは現国の先生。

つまり今は四時間目・・・世界史は一時間目・・・

俺は三時間分寝たのか・・・やっちゃったな

俺は結構焦っていた。もうすぐテストだからだ。しかし、ここで追い打ちをかけるかのように

キンコーンカーンコーン

四時間目終了のチャイムが鳴り響いた。

俺は、ほぼ午前中の授業を寝るために費やしてしまったようだった・・・はあ。

途方にくれている俺に、隣の女子が話しかけてきた。

「良介君いつも寝ないで授業受けてるのにめずらしいね。それに寝ると全然起きないし・・・」

「ははは・・・」

俺は笑うしかなかった。

・・・はあああ。

午後の授業は寝る事無く受けることができた。まあ、あたりまえだけど。

そして放課後、昇降口で麻弥と出会った。

「おつす、王・・・良介」

「よう、麻弥」

よしよし名前をちゃんと言ったな。もし“王子様”って言ったら殴ろうと思ってた。

「いきなりで悪いんだけど、あのさ俺の隣の席って空ってやつなんだけど・・・」

「クラス一緒なのは知ってたけど席隣なのか？」

「ああ。それで今日親に向けて大事なプリント渡ったじゃん？」

「ああ、あれね」

「でさ、困ったことにそれを空の家に届けないといけないんだよな・・・」

「おまえ空の家がどこだか知ってるのか？」

「先生から道は聞いた」

「ふーん・・・」

なんかいやな予感が・・・

「それで？」

「俺、今日家族で出掛けないといけないんだけど・・・空の家によつてからだと時間がな・・・」

そう言うとき麻弥は困った顔をして俺をちらちらと何度も見てきた。

「・・・まあこの間付き合ってやれなかったからなんとかしてやろう。
「わかったよ、俺が行ってやるよ」

これで貸し借りゼロだ、とも言った。

麻弥はニヤリとして、

「いやー悪いねー」

と言った。

「つか、最初から俺に行かせようと思ってたんだろ？」

「ありや？ばれちゃってた？」

そりゃあ、もう

「超バレバレ」

「なーんだー。だったら最初っから俺の素っ晴らしい演技を見せる
事無く、普通に頼めばよかった」

「ったく・・・まずそんな事いいからプリントよこせ」

そこで麻弥はカバンから空に渡すプリントをだした。

「はい、これ」

「このプリントを届けないといけないってことは、空は今日学校休
んだのか？」「ああ、いつも元気なあいつが休むなんて信じらん
ないよ」

つか、うるさいくらいだ。と麻弥は付け足した。

「仕方がねー見舞い代わりに行ってやるか」

「そうしてやれそうしてやれ」

そして麻弥は本当に急いでいるらしく昇降口から校門に向けて走り
去っていった。

俺は靴を履きかえて外にでた。相変わらず外はいい天気で、空に雲
はなく青空だけがどこまでも広がっている。そして俺は校門までの
五十メートルを、ゆっくりと歩いていった。今日はいつもより暑い。
木陰がいつも以上に涼しそうに見えた。

着いた。

空の家だ。学校から結構遠いんだな・・・

学校から歩いて三十分。毎朝歩くのは大変なのではないだろうか？

俺は大変だ。

玄関の前に立つ。

チャイムを押す。

ピンポン

少し間があり、インターホンから声が聞こえてきた。

「どちら様ですか？」

インターホンなので声の判別がしにくい。誰の声だろう？空の母さんかな？

「えつと、良介です」

「えっ！？良介！？」

・・・どうやら空らしい。

「あー空か？うん、俺」

「な・・・何しにきたのよ？」

「なあ、とりあえず中に入れてくれないか？外はいい天気なんだけど暑くて・・・」

「・・・いま開けるから」

家の中から玄関に向かって歩いてくる足音が聞こえた。
カチャ

「どうぞ」

空が戸を開けてひょこつと顔を出した。

「おじゃまします」

「今、私しか家にいないから」

「母さん仕事か？」

「うん」

俺は居間に通されるのかと思ったが

「私の部屋二階だから」

「へ？俺、学校から預かってきたプリント渡したらすぐ帰るよ？」
「・・・少しゆっくりしていけば？」

「・・・親がいないところに、お年頃の男女が二人つきりっていうのは・・・と思ったのだが」

「少しくらい、いいじゃん」

「でも、お前風邪か何かひいてるんじゃないのか？」

「さっきまで眠ってたから具合は良くなったの」

「いや、でも・・・」

俺がもごついてると、空は少し顔をそむけながら

「・・・私と二人はいや？」

と言った。

「は？お前、どうした？いきなり変なこと言うなよ」

「・・・とにかくさ、部屋に来てよ」

「・・・わかったよ」

俺はしぶしぶ了承した。

空の部屋はすぐく片付いていた。というより、要らない物が一切ない感じだった。空らしいといえば空らしいのだが・・・

さっきまで寝ていたせいかカーテンが閉まっており、外はあんなに明るいのには部屋は薄暗い。ずいぶんこのカーテンは光を遮るようだ。空と俺は部屋の中央にある足の短いテーブルに向かい合う形で座った。

「まずは、プリント渡しておくな」

「ん、ありがと」

「・・・なあ、いつ頃から具合悪いんだ？」

「今朝から」

「何で悪くなった？」

空はうーん、と唸り困ったような顔をして

「昨日、色々あつて・・・それで寝れなくて」

「そつか・・・今は本当に大丈夫か？」

「うん大丈夫」

そこで空は無理矢理笑顔を作った。

「あ、何か飲み物持つてくるね」

「おう、悪いな」

空は立ち上がり部屋から出ていった。

俺は部屋を見渡してみた。目についた本棚にはたくさんの本、漫画、CDが所狭しと並んでいた。その本棚の隣にある洋服掛けには五、六着の服と制服、そして浴衣が掛けられていた。

ついつい緋奈の浴衣と比べてしまった。空の浴衣は大小の水玉模様のついたよくあるやつだが、鮮やかな色づかいがずいぶん大人っぽい印象を与える。空が着たところ、少し見てみたい気もした。

・・・そういえば昨日は空も夏祭りに行ったんだよな。

「お待たせ」

戻ってきた空の手には麦茶とクッキーの盛つてある皿があつた。

空はテーブルの上にそれらを置き、また同じところに座った。

俺は空が持つてきてくれた麦茶を一口飲んだ。渴いた喉が潤つていく。

「空は昨日、誰と夏祭り行つたんだ？」

「クラスの友達と」

「なんだ、だったら最初っからそいつらと行けば良かったんじゃないのか？」

「私は・・・良介と行きたかつたの」

「なんで？」

「それは、その・・・かつこいい人と歩いて、羨ましがられたかつたからよ」

俺は顔が熱くなるのを感じた。空にまでかつこいいと言われるとは思つてもいなかった。何だか複雑な気分だな・・・

しかし空はそんな俺を気にせず続けた。

「でも、そのかつこいい人は・・・可愛い女の子と手を繋いで楽しそうに歩いてたね・・・あれは彼女さんかな？」

なんか昨日のたこ焼き屋のオヤジと同じ勘違いしてるし・・・

「あつ、あれは幼なじみのだな・・・」

俺は必死に誤解を解こうと思った。しかし空は急に真顔になり、少し顔をふせながらまた俺を気にせず言った。

「良介・・・私は・・・私はそれを見た時、ショックだったよ・・・」
それは細く、とても切ない声色だった。

・・・え？

どういう意味だよ・・・

俺は弁解の言葉が言えなくなってしまった。

「私・・・良介とその子が神社の裏に行ったのをみちゃったの・・・それに気になって・・・それで・・・見てたの」

見てたのかよ・・・

「ごめん・・・」

「どこまで見てた？」

「良介が女の子に抱きつくまで」

「・・・あんまりまわりのやつに言っなよ？」

「・・・うん」

思い出しただけでも恥ずかしいのに、見られていたとは・・・しかも空に

「・・・ねえ、良介はあの子のこと・・・好きなの？」

「なっ、何言っただよ！そんなわけねーだろ！」

俺はなぜか慌ててしまった。それが余計に空を勘違いをさせてしま

った。

「そつか・・・可愛いもんね、私よりずうっと」

「だから好きじゃないって!」

「はいはいわかつ・・・ゴホッゴホッ」

空はせきをしだした。

「大丈夫か?」

「ケホッ・・・たぶん」

「俺そろそろ帰るよ」

「・・・じゃあさ、台所にある薬、持ってきてくれない?」

「わかった」

俺は立ち上がり台所へ向かった。

階段を下りて右側に台所あった。そこはきれいに掃除されており、調理台はピカピカだ。そのピカピカの調理台に薬が袋に入って置いてあった。

俺はその袋を持って空の部屋に戻った。

「これだろ?」

「そう、それ。ありがとう」

「おう。じゃ帰るから。お大事に」

そして俺が部屋から出ようとしたとき

「ちよつと待つて」

と、空に呼び止められた。

「ん?他にもなんかあるのか?」

「そうじゃないんだけど・・・私の近くにもうすこし座っててくれない?」

「・・・?」

何だろう?と思いながらも俺は空の右隣に座った。

「この箱の上に開いてる穴から中を見て」

空は手のひらサイズの小さな箱を俺に渡してきた。

俺は穴から中をのぞいてみた。しかし中は暗くてよく見えなかった。
「なんも見えないぞ?」

「見えなくてもいいの。そしたら・・・目をつぶって、中に何があるか想像して」

「？お、おう」

なんも見えなかったのに何を想像しろと？

俺は黙って目をつぶっていた。

すると、突然

「・・・そつ空！？」

空の暖かくやわらかい手が、俺の頬を両側からやさしくおさえるように触れてきた。

「まだ目あけないで。お願い」

俺はわけが分からなかったが目をしっかりとつぶっていた。

「良介・・・」

空の吐息を近くに感じる。

「良介・・・」

空の手はほてった俺の頬をさらに熱くしていた。

「お、おい・・・空？」

混乱気味の俺に空は、体重をかけてきた。倒れそうになってとっさに後ろに手をつく。

空が俺にしなだれかかっているような体勢になってしまった。

「空いつたい・・・」

どうしたんだ？と聞こうと思ったが、それはできなかった。

突然、唇にやわらかい感触。俺はそれが何かを理解するまでに少し時間がかかった。

それは、唇と唇が触れ合ったときの感触だった。

空は俺に“キス”をした。

それはやさしくて、やわらかい。初めての感触だった。

唇が触れあってから、おそらく五秒。ゆっくりと空は俺から離れた。俺はそろそろと目をあげた。そこにはうつむいた空がいた。

「空、おまえ、いきなり・・・」

空は俺が混乱してるのを気にも止めずに、小さな声だが、はっきりと、しっかりと。

「私、良介のことが好き」

・・・え？

「ずっと・・・転校する前から、ずっと・・・好き」

・・・本当かよ？

「それでね、私、良介と同じ高校行きたくて、ここの学校を受験したの・・・合格したとき、ほんとううれしかった。やっと、また良介に会えるって」

俺は黙って空の話を聞くことしかできなかった。

「でも、一年生のときは全然話できなかったよね？すごく悲しかった。それに私のこと忘れてるんじゃないかって胸が締め付けられるほど不安になった。そんな気持ちで二年生になって、この間公園で二人っきりで話せたときに、やっと不安はなくなったの・・・それに、何だかすっごくかつこよくなってるし・・・私ますます良介のことが・・・」

そこで空は「えへへ」と、どう見ても無理矢理で不自然な笑顔をつくった。

「私、それから良介のことしか・・・考えられなかった・・・でも、昨日の夏祭りで知らない女の子と手繋いで歩いてたし・・・」
そこまで言った空の目には涙がたまっていた。

「それに・・・良介から・・・抱きついちゃうし・・・何だか良介が遠くに行っちゃよううで・・・すごく悲しかった」

たまっていた涙が、こぼれ落ちた。床にしいてある絨毯に、小さな染みができてしまった。

「それ、に良、介の、方も、まんざ、らじゃな、いみたいだし・・・」

「空それは・・・」

それは誤解だと伝えたかった。でも、言葉にならなかった。

「ねえ教え、てよ良、介・・・私、の、この気持、ちは・・・どうす、ればい、いのよ・・・」

空は溢れた涙を手で拭ってはいるが、涙はとどまることを知らずにぼろぼろと落ち続けていた。

「良介・・・りようすけ・・・りよう、すけえ・・・」

俺の名前を呼びながら泣き続ける空。俺はそんな空に自分の気持ちと言っことにした。

「空・・・泣き止んでくれよ」

「だって・・・だってえ」「空が・・・その・・・俺のことをそんなふうに想ってくれてて正直うれしいよ」

「り・・・りようす、けえ」

「だけど、俺は空のことをそんなふうに想ってなかった」

「う、うえ・・・」

空はまた泣き声をあげそうになってしまった。

「泣くなよ。最後までちゃんと聞けって」

「うえ・・・つく・・・うん」

「でも、これからは違う。空をちゃんと・・・見るから」

「・・・見る、てどうい、うふうに？」

「まあ・・・可愛い女の子として、かな」

空は少しその言葉の意味を考えてから

「・・・もう、何言っ、てんのよ」

と言つてぷつ、と吹き出した。その時の空は涙でくしゃくしゃになつて
いる顔で自然な笑顔をみせてくれた。

「そうそう空は泣いてるより笑ったほうがいいよ」

「・・・うん、わか、った。あり、がとう」

空はそう言つて最後にもう一度涙を拭つた。

「・・・じゃ、俺そろそろ帰るよ」

「うん、・・・今日は色々ごめん」

「いや、いいって」

「・・・キスし、たことは、忘れ、てちょうだい」

忘れられるかつつの・・・

「忘れるように努力する」

「わたしも、なるべく、く、努力する、から」

でも、結局空が泣き止むまで俺はずっと空のそばについてやった。
しばらくして、空は泣き止んだが俺が部屋を出るまでずっと、ひっ
くひつくと言つていてうまくしゃべれていなかった。

玄関で靴を履き、外に出る。

空の部屋はカーテンでずいぶん暗かったが、外は眩しいくらい夕日
が照つてていた。空が夕暮れで橙色に染まっている。

・・・空・・・か

あの空が俺のことを好きだなんて思つてもいなかった。それに・・・
あれがファーストキスだなんて言えない。くそーなんか悔しい。
それにずいぶん恥ずかしいことをされたし、言つたのだ。今になつ

て恥ずかしくなってきた。

さつき空の家で起こったことは忘れようとしながら俺は家まで歩いていった。

この日が照ってあつつい中を歩いていくのは気が重かったが、心はずいぶん軽やかだった。

空の色と空の想い（後書き）

時間かかった！遅くなって済みませんでした。DOGGOONです。
今回はずいぶんと時間食ったちゃったよ。うまく表現できないところがたくさんあったりして何度も何度も書き直したんです。

ホントーに申し訳ない。でもその分良い作品になっている気がします（爆）

で、次は緋奈の手術前の話になる予定です。
それではさようなら！また会いましょう！

音の世界の緋奈（前書き）

「・・・頑張れよ、緋奈」

音の世界の緋奈

「おう良介、一緒に飯食っていいか？」

「・・・」

「おい、良介ー？」

「・・・」

「良介・・・？」

「・・・あ、ごめん」

「どうした？なんかあったか？」

めずらしく麻弥が俺のことを真面目に心配してくれてた。

「いや、緋奈が今日手術なんだよ」

そう。今日は夏祭り五日後、緋奈の手術の日なのだ。

それで俺は朝からずっとそわそわしていた。別に俺が受けるというわけでもないのに。

今は昼休みで、俺は学食を食べにきていた。いつも昼休みになると人であふれかえるという大人気の学食。それには理由がある。その理由とは、唯一他の学年の生徒と会うことができるということ。つまり出会いを求めてここにきている人がいるのだ。むしろここにきている人の七割近くはそれが目的だろう。

でも俺と麻弥は純粹に、ご飯を食べるために来ている。

俺は焼き魚と味噌汁などがついてきて、あとのおかずは日ごとに変わる焼き魚定食をいつも食べている。麻弥は大きなハンバーグのついてくるハンバーグ定食をよく食べている。案の定俺に話し掛けてきたときも、ハンバーグ定食ののっているおぼんを持っていた。

「じゃあ緋奈ちゃん目は見えるようになるのか？」

「いや・・・治るか治らないか、確立は半々だよ」

「そうか・・・」

麻弥は少しがっかりしながら俺の隣に座ってきた。

「手術・・・か」

ハンバーグを箸で半分、さらに半分、さらに半分・・・とやりながら、麻弥は言った。

「俺も手術受けたことあるんだよ」

俺は多少驚いた。

「どこが悪かったんだ？」

「なーなんてことはない、ただの盲腸だよ」

と言って笑った。

思わせ振りなしやべり方だったから結構大変だったかと思ったじゃないか。と麻弥に毒づこうと思ったのだが、麻弥は笑うのを止め、急に真面目な顔で俺を見た。

「あの時は盲腸の手術だから、まず失敗はない。って医者に言われたけどやっぱり俺、恐かった。だってよー、自分の体が、腹が切られるんだぜ？それって怖いと思わないか？」

俺は健康優良児だからもちろんそんな恐怖と出会ったことはなかった。出会ったときがどんな感じなのか、なんて俺には想像もつかない。

「想像つかないだろ？」

まるで俺の思考を読み取ったかのように麻弥は言った。

「ああ、つかない」

「まあ簡単に言うとな、とにかくこえーんだよ」

そう言うのと麻弥は小さくなったハンバーグとご飯を食べ始めた。

俺も骨を取りながら魚を食べ始めた。

「・・・緋奈ちゃんのこと励ましてやれよ？」

麻弥は箸を止めて言った。

「ああ、わかつてる。色々サンキュ」

「手術の成功を俺も心から祈ってるよ」

「・・・やさしいやつだ。」

「わかった。その言葉緋奈にしっかり伝えとく」

それきり俺と麻弥は食べることに集中した。俺が食べおわり、先に席を立つまで会話はなかった。でもそれも麻弥のやさしいところだと思った。あえて何も話さない。それでも麻弥の気持ちは伝わってきた。

この気持ちも緋奈にしっかり伝えておこう。

「・・・だつてさ」

「麻弥さんってやさしいんだね。今度会わせてね」

「おう、麻弥も大歓迎だろうよ」

俺は学校が終わってから緋奈の病室に飛んでいった。

それでも手術一時間前に着くことが精一杯だった。けれども、緋奈はとても喜んで、来てくれてありがとう。と言った。

それから俺は麻弥のことを話して、その気持ちをしっかりと伝えておいた。

それで、さっきの感想を言つたわけだ。

「なあ、恐い・・・か？」

緋奈は小さくコクンとうなずいた。

「・・・だよな、そうだよな・・・いまさらだけど、何か俺にできることないか？」

「良ちゃんにできる事・・・かあ」

緋奈は少し考えてから、欲しいものがあるの。と言い、それが何なのか聞いた。

「うん、それはね、良ちゃんが夏祭りの時に掬ったスーパースポールを一つ、くれない？」

「あのスーパースポールか？ちょうど今もってるけど・・・」

本当は麻弥にお土産としてあげようと思っていたのだ。すっかり忘れていた。あんなにきれいなスポールを麻弥にあげれば、すごく喜ぶだろうな。と思つて掬つたのだ。麻弥は無類のスーパースポール好

きである。

俺はカバンの中からスーパーボールの入った小袋を取り出して、ス
ケルトンブルーのボールを緋奈に手渡した。

「はい、これ」

「友達にはあげなくていいの？」

「ああ、別にいいんだ」

「じゃあ、遠慮なくもらうね」

緋奈は俺が渡したボールを大事そうに両手で包み込んだ。

「えへへー、これがあればなんだか良ちゃんがすぐそばにいるみた
いだよ」

「・・・そいつはよかった」

ふと、時間が気になったので時計を見た。

「そろそろだな・・・」

「・・・もうそんな時間かあ」

その瞬間、病室のドアが勢い良く開き緋奈の担当医が入ってきた。

「緋奈ちゃん、そろそろ行こうか」

担当医はそう言って数人の看護婦を呼び出し、緋奈を手術室に連れ
ていこうとした。

「先生、緋奈をよろしくお願いします」

俺がこう言つと医者は

「もちろん全力を尽くすつもりでいるよ」

と、ありきたりの言葉を言った。でも、俺はその言葉をとて頼も
しく感じた。

俺は手術室に向かう緋奈の後ろ姿を見ながら、心の中で頑張れ、頑
張れ、とずっとなぐさ言っていた。

緋奈の姿が見えなくなつて後ろを振り返ってみると、そこには緋奈
の母さんが歩いてきていた。

俺は頭を下げた礼をした。

「どうも、こんちは」

「こんにちは良介君。緋奈はもう行っちゃったのかしら？」

「さっき担当医と数人の看護婦に連れられていきましたよ」

「あら、そうなのね。手術室の説明されてたらすっかり遅れちゃったわ」

緋奈の母さんはあまり緋奈とは似ていない。どちらかというと父さんのほうに似ているらしい。（緋奈談）

「良介君、いつも本当にありがとうね」

と言ってやさしく微笑んだ。このやさしい笑顔は緋奈とそっくりだ。

「いえ、いつも暇なんで大丈夫です」

「そうなのね、でも私は良介君にすごい感謝してるわよ」

「俺、なんか感謝されるようなことしましたっけ？」

「いつもお見舞いにきてくれるでしょう？だから緋奈もここまでくれたのよ。良介君、本当にありがとう」

「え、いや、あの、その・・・」

すっかり照れてしまった俺をみて、緋奈の母さんは、ふふつ、と笑った。

「あ、そうそう。緋奈の手術は、だいたい七時間くらいかかるって言ってたのよ。だから、良介君は帰ったほうがよさそうね」

「え、でも・・・」

しかし俺は迷惑を掛けるわけにはいかないと思い、その提案を承諾した。

「明日良介君が学校から帰る頃に電話するわ」

「はい、お願いします」

「じゃ私そろそろ行かないと・・・じゃあね良介君」

緋奈の母さんはそういうと手術室の方へ足早に行ってしまった。

俺は緋奈の母さんの背中を見えなくなるまでずっと見ていた。・・・
頑張れ、緋奈。

病院からでた俺はふと足を止めてまわりの音に耳を傾けた。聞こえてくるのは

人の声、犬の鳴き声、風の音、その風が葉っぱを揺らす音、目を閉じればそこには“音の世界”が広がっていた。・・・緋奈はこの世界から抜けることができるのだろうか？

俺は目をあける。眩しい光が俺の目に刺さってきた。同時に、不安も俺の心に刺さってきた。思いつきり、ざっくりと。

「こんなに人のことで不安になるのは初めてだ・・・」
だれにともなくそうつぶやいた。

まるで心臓の辺りに真っ黒のマントをかぶせられた気分だった。

「頑張れよ・・・緋奈」

本日二度目のつぶやき。

しかし、この不安は翌日の一本の電話でスッキリ解消された。

「良ちゃん、手術成功したよ！」

俺は情けないことに腰が抜けてへたりこんでしまった。

それと同時に電話でよかった、と思った。なぜなら、これまた情けないことにもし実際に会って言われたら泣いてたかもしれないからだった。

音の世界の緋奈（後書き）

長らくお待たせしました！DOGGOONです！

今回はこちらの都合により後書き短くさせていただきます。

読んで頂いて有難うございます。これからも読んでやってください。
それでは！

緋奈の瞳（前書き）

「DからEになっただから」

緋奈の腫

「はぁ・・・はぁ・・・」

俺は今走っている。

家から歩いて二十分の病院までの道のりを全速力で走っている。

「はぁ・・・はぁ・・・」

なぜ走っているのかって？それは、俺が待ち望んだことがあるからだ。

そう、今日は緋奈が音の世界から抜け出す日。

手術から一週間たち、ついに包帯がとれるのだ。

「はぁ・・・はぁ・・・」

病院に着いた。

緋奈の病室まで、息を整えながら歩いていく。俺は緋奈の病室に近づくにつれてどつくんどつくんと鼓動が早くなっていることに気付いた。

緋奈の病室のドアは開いていた。俺はノックもせずに病室に入る。

いつものように窓は開いていて風が病室内に吹き込んでいる。

その窓の前に緋奈は立っていた。緋奈の髪は風を受けて気持ち良さそうに踊っている。一本一本がきれいに、そしてうれしそうに・・・。

「緋奈」

俺が呼ぶと緋奈は、はっとして後ろを振り返った。

「良ちゃん・・・？」

「ああ、俺だ」

緋奈は一瞬うれしそうな顔をしたが、次の瞬間、

「良ちゃ・・・ひつく」

「ひ、緋奈！？」

緋奈は急に泣きだしてしまった。

「えぐつえぐつ、りよ、う、ちゃあぁん・・・」

俺は戸惑いながらもいきなりわんわん泣きまくり、ついには、その場にへたりこんでしまった緋奈に近づいていった。

「おいおい、どうしたよ？」

しゃがみこんで同じ目線で緋奈に話し掛ける。

と、そのとき

「のわっ！」

緋奈が俺の胸の辺りに頭を突っ込ませるように俺にいきなり飛びついてきた。

「ったー・・・」

頭は打たなかったものの背中をしたたかに打ち付けてしまった。

「良ちゃん・・・！良ちゃん・・・！」

緋奈は俺の胸の辺りに顔を埋めて泣いている。背中は床が冷たいし猛烈に痛い、反対の胸や腹の方は緋奈が乗っかっているせいで暖かく、心地よい重みを感じる。

「どうしたんだよいきなり？」

「良ちゃんのこと見たら、わからないけど涙が・・・おかしいね？嬉しいのにな？なんでだろう？」

そして緋奈はさらに俺の胸に顔を押しつけてきた。

「あのね、一言言いたいことがあるの」

「ん？」

緋奈は俺の胸からゆっくり顔を上げて、俺をまじまじと見つめながら「今まで、ありがとう。良ちゃん」

と言った。緋奈が言った「ありがとう」その一言にはいろんな感情が詰め込まれていたと思う。感謝の意味だけでなく、他のいろんなことが。

「俺は、そんな感謝されることなんかしてないよ？」

「ううん。たっくさん助けてもらったよ。だから私は今、こうして・・・」

そこまで言ってから緋奈は顔を俺の顔に近付けてきて、

「目が見えるようになったんだよ」

と、言った。

緋奈の長くてきれいな髪が俺の目の前に垂れていた。俺はその髪なんてきにせずに、緋奈の頭をくしゃくしゃっ、と撫でてやった。そして俺もずっと言いたかったことを言った。

「よく、頑張ったな・・・緋奈。本当におめでとっ」

そういうと緋奈は、また俺の胸に顔を埋めて泣き始めてしまった。さらに冷たい床と、まだじんじんする俺の背中の中に小さくて細い手を滑り込ませて、緋奈は俺に抱きついた。

「良ちゃんのこと、大好き」

その言葉を聞いたとき、俺の胸で泣いている緋奈が、俺に秘めてた想いを打ち明けて泣いた空とだぶり、俺の思考を一瞬狂わせ、

「・・・」

結局俺は何も言うことができなかった。別に緋奈と空を比べているわけではないのに、空が脳裏に浮かんた。その間、緋奈は何も言わずにじっと俺に抱きついていた。

その後、泣き止んだ緋奈は俺から離れてベッドに座り、俺はベッドの前に椅子を置き、それに座った。

「・・・さっきはごめんね」

「大丈夫だつて、気にしてないから。目が見えるようになって嬉しかったんだろ？」

「・・・うん」

せつかく見えるようになったのに緋奈は泣いて赤くなった目を、手の甲で何度も拭っていた。

その姿をみて、俺はいまさらながら聞いてみた。

「なあ、本当に見えるんだよね？」

「もちろん。でも遠くの物はぼやけて見えるの」

遠くの物を見ようと目を少し細めながら緋奈は言った。

「だから、さつきは・・・あんな近づかないと良ちゃんの顔が見れなくて・・・」

目を細めたあと、そのまま目を閉じ、顔を赤くした。

「それでか・・・まあそれはいいとして、いつ頃ちゃんと見えるようになるんだ？」

「お医者さんは一カ月って言ってたよ」

「一カ月か・・・長いなあ」

緋奈はうつん、と首を振って

「一カ月なんてあつという間だよ」

と言った。その時の緋奈の顔には希望が満ちあふれているように見えた。俺はその顔を見つめた。

そして、ふと思う。

緋奈はこれから何を見るんだろう？

それは俺にはわからないし、緋奈にもわからないかもしれない。とりあえず、夏祭りの帰りに見たような満天の星空を緋奈と一緒に見たいと思う。

・・・傲慢かもしれないけど、今まで緋奈が見ることのできなかった場所、物を俺が見せてやろう。

「良ちゃんどうかした？」

見つめられていることに気付いたのか緋奈が俺にたずねた。

「なんでもないよ」

そういつて俺は笑った。

窓から吹く風と、太陽の光は暖かく、俺たちをやさしく包み込んでくれていた。一カ月後が待ち遠しい。

緋奈の瞳（後書き）

今回も読んでくれて有難うございます早速次に取りかかりますので、
では！

紀里姉と俺（前書き）

「な、なーによおう」

紀里姉と俺

「めえーんどおーくうーさあーいい」

緋奈の目が見えるようになって三週間近くになる。経過は順調で、すでに遠くの物も見えるようになったので今は退院して久しぶりの家にいるようだ。もうすぐ学校にも復帰することになるらしい。どこの学校だか分らないが。

今は学食で昼食中、ついさっき気持ち悪いくらい間延びした声を出したのは隣に座っている麻弥だ。

しかし、俺は無視して食事続ける。

「つつこんでくれないのかあーい？」

「あえて、つつこまないんだよ」

「なんでさ？」

「どうせ俺になんか手伝えっていうんだろ？」

「・・・なぜ分かった？」

「今までの経験から」

麻弥はむう、と少し唸ったが、

「ふっふっふ・・・」

と、いきなりふくみ笑いをした。

「おーいキモいぞー？」

「今回は違うのだよ良介くん！確かに君の助けは借りようと思ったが、なんと！今回はちゃーんと双方に利益があるのだよ！」

双方に利益ねえ・・・

「一応聞いてやるよ」

「おお、そうか！では心して聞いてくれ！・・・」

「まっ、まじか？」

一通り麻弥が説明し終わったあとの俺の感想だった。

「ああ、まじだ」

いったいどんなことだったかというと、

麻弥のばあさん、じいさんは小さな旅館を経営していて、来週の今日に来る予定だった団体さんがキャンセルになってしまい、その分の埋め合わせを孫の麻弥とその友達で来ないか？と言われたらしい。ちやうど今週で学校は長期休暇、つまり夏休みに入る。これはもう行くしかない！と麻弥は思い、行く！と速答したそう。そこで俺も行かないか？ということである。

「本当に俺も行つていいのか？」

「もちろん・・・でも六人くらい連れてきんさいって言われたからな・・・」

「人数はこつちで三人くらい調達しておこうか？」

「それを頼もうと思つてたんだよ」

「分かった。三人誘つてみるよ」

「頼んだ。詳しいことはまた明日な」

そうして俺たちは食器を片付け、それぞれの自分達の教室へ戻った。

「ただいま・・・って誰もいないよな」

学校が終わり帰宅した俺は誰もいないのに“ただいま”と言ってしまった。いつもは居るはずの母だが今日は友人と食事に行くと朝にうれしそうに語っていた。

しかし、俺は異変に気付いた。

「ん？・・・誰がいる？」

玄関にいつもは見えない靴が一足並べられていた。

俺は靴を脱ぎ居間に入り、辺りを見回す。すると、

「・・・うゝん」

とソファの方から声が聞こえた。俺はそろーっとソファの背もたれから顔を覗かせると、そこには・・・

「げっ・・・何で紀里姉が!?!」

県外の大学に行ってるはずの姉の姿があった。

「ん・・・? 誰?」

やべっ起きた!

「・・・良介!」

いきなり紀里姉はガバっと起き上がり

「ひっさしぶりー! っておわあ!」

起き上がった勢いでソファから転がり落ちた。あ、テーブルの足に頭ぶつけてる・・・

「おいおい、大丈夫かよ?」

紀里姉は頭を強く打ったらしく涙目になりながら頭をさすっていた。

「ううー・・・ああー」

・・・大丈夫じゃなさそうだ。

「いったーい・・・」

「ったく、一人暮らししてるから少しはましになったと思っただけなんぜん変わってねーのな」

はははと紀里姉を笑ってやった。

「笑うなよなー・・・」

と、言いながらも紀里姉も俺に釣られて笑いだした。

ひとしきり笑い終えた後、俺はなぜ帰ってきたのかを聞いた。

「そりゃー、あんた夏休みだからに決まってんでしょ?」

「大学とかって補習はないのか?」

俺のこの質問に対して紀里姉は人差し指を顔の前で左右に振り、「ちゅちゅちゅ」と言い、

「私、成績優秀だから補習とかそんな馬鹿馬鹿しいことはしないでいいのよ」

と答えた。

「ふーん意外だな・・・」

「勉強で解らないところは私に聞きなさい」

紀里姉は誇らしげに胸を反らした。

「・・・ほんと紀里姉は変わらないな」

「そんなことないわよ？胸だつてこの歳でもまだ成長してるのよ。

この間なんかDからEの下着に・・・」

「そつ、そんなことを言ってるんじゃないくて・・・」

「お？良介君、顔が真っ赤ですよー？どーしたのかなー？」

ニヤニヤとした、いやらしい笑いを顔にはりつけながら紀里姉がソファアの隣に座っている俺の腕に腕をからめて、

「どうした？良介少年！腕に未知の感触を感じないかい？うりうり腕にご自慢の胸を押しつけてきた。」

「やめろ、このド変態姉！」

必死に振りほどこうとするがなかなか離れない。

「こら！動くな！」

「じゃあ離れろよ！」

紀里姉は口を尖らせてムーッ、とうなりながらやつと離れた。

「ったく・・・」

はぁーつと俺は深いため息をついた。

「もー、照れちゃってー」

「さつさと帰っちまえ！」

「そんなこと言わないでよー」

紀里姉はまた口を尖らせてムーッ、と言った。

「・・・その口を尖らせる癖、まだ直ってないんだな」

「んー・・・まあね」

「直したほうがいいんじゃないか？」

「何でよー？」

「かーわいいお顔が台無しですよー？」

紀里姉の顔が少し赤くなった。

「なっ、なーによー！」

「さっきのお返し、赤くなってる赤くなってる！うはははっ！」

… お帰り、紀里姉。

ポカポカ俺を叩いている紀里姉を見ながら俺は心の中でつぶやいた。
久しぶりに会い、いろいろ変わっていて表にはださなかったが実は
内心驚いてしまった。

「… っって痛！」

「必殺紀里ちゃんパンチ！」

「パンチっていいながら思いっきり俺の爪先、かかとで踏んでるじゃねーか！」

「男はそんなこと気にしない！」

…… 前言撤回！やっぱり早く帰れ！この馬鹿姉！

紀里姉と俺（後書き）

お待たせしました！第九話です！

ついに姉ちゃん登場。これから夏休みはこの姉ちゃんに振り回される予定です。

つーか夏休み中に投稿するつもりが夏休み終わってから夏休みの話かよ！っていうツツコミは無しの方で（爆）

今回も読んで頂き有難うございます是非次回も読んでやってください。それではっ！

旅館にてゝ魚の間々（前書き）

緋奈「気にしない・・・で」
空「気に、しないで」

旅館にてゝ魚の間ゝ

「着・い・たー！」

「空気がおいしーい」

すうー、はあー

ずっと座りっぱなしだった疲れをとるためと、空気を味わうために深呼吸をした。

夏休み初日から四日間。俺は友人達と旅行に来ている。今はその目的地の最寄りの駅に着いたところである。

旅行のメンツは俺、麻弥、空、緋奈、宮晴、そして…

「良介ー私の荷物も持ってくんない？」

紀里姉。

「自分で持てよ…ったく」

絶対に連れてきたくなかったのだが母さんにぼろつとしゃべってしまったのがまずかったか…地獄耳というのは恐ろしい。

「…何でついてくんだよ」

超小声で言っただが

「何か言っただー？」

…恐ろしい。

「じーちゃん！ばあちゃん！」

旅館に着いた。中はそんなに古くなく、掃除もいきとどいているようにでむしろ新築のようだった。床なんか光っている。

「待ってたよお麻弥、泊まってる間はあるまいお客さんいないから少しだっただら騒いでいいぞお」

「了解！よっしみんな部屋案内するぞー」

わーと叫びながらみんなは走っていった。

「…これからお世話になります」

「おやおや、礼儀正しいんだねえ。麻弥の友達とは思えないわあ」
お婆さんがふふふと笑い、

「んだなあ、んだなあ」

とお爺さんが相槌を打った。

「麻弥は学校ではどうなんだい？友達はいっぱいいるのかい？」

「僕の他にもたくさんいますよ」

「んだか、んだか…それはよかった」

二人微笑みあった。…仲のいい爺さん婆さんだなー。

「…あら、もうみんな行っちゃったわね。部屋はそこを真つすぐ行つて左にまがり、手前から二番目ですよ」

「はい、ありがとうございます」

俺は一礼してぴかぴかの床を滑らないよう気を付けながら歩いていった。

「これ良介の分」

みんなに追い付いてからいきなり、麻弥から小さく三角折りにした紙を渡された。

「みんな紙開いて」

…紙には魚の間と書かれている。

「じゃ書かれてるほうの部屋に入ってー」

「…なあ麻弥、女子と男子で分ければいいんじゃないか？」

今、最もな意見を言ったのは宮晴だ。紹介が遅れたがこいつとは中学の頃から仲がいい。高校は違うが、ちよくちよく連絡を取り合い遊ぶことが多い。

「えー？それじゃあおもしろくないだろ？」

「…ったくわかったよ」

「宮晴君納得したように見えるけど実はうれしいんでしょ？」

紀里姉の茶々が入る。それに対して宮晴は

「ばれたか!？」

と言い、麻弥が

「うははっ」

と笑う。それにつられてみんなで笑った。

「はは…じゃ部屋に入ろうか」

「そうだなー部屋に入ったらあとは別行動なー」

「ういー…で魚の間は他に誰いるんだ？」

「はいはいー」

と元気に手を挙げてるのは空と…空…と…

「…だけっ!？」

二人ハモリながら疑問を口にする。

「あちゃー引き悪いねー…」

「おい!何で半分づつに別れねえんだよ!」

「くじには十枚紙入れて五枚五枚で部屋を書いたんだからこういう

こともあるって」

「何でそんなに入れてるんだよ!」

「そっちのほうが楽しいだろ!」

「楽しくねーよ!わけわかんねーよ!第一な…」

「こら!良介!往生際悪い!決まったんだから仕方がないでしょ!」

と紀里姉が怒鳴る。

「仕方がないって…そういう問題じゃないだ…」

「良介?」

「う…」

紀里姉があまりにも恐い笑顔を見せてきたので俺は渋々従うことにした。紀里姉には反抗したって無駄なのだ。そして俺の心情とは正反対にうれしそうにして

「良介入ろっ!」

といい空は魚の間に入った。それに続いて俺も入ろうとしたときぐいっ

と誰かに服の裾をひっぱられた。

「…良ちゃん」

緋奈だった。

「おう、どうした？」

「あのね良ちゃん…あのね…」

「ん？」

他の奴らは各部屋に入っていった。廊下には俺と緋奈だけだった。

「…あのね私」

ここまで言いかけた時

「良一介ー何したのー？」

と空が部屋から叫んだ。

「すぐ行くー」

と返事をしておいた。

「…で緋奈、何？」

「……………うつん、何でもないの。気にしない…で」

緋奈は、はにかみながらそう言っていると俺に背をむけ、自分が泊まる部屋に行ってしまった。

「良介、緋奈ちゃん何て言ってた？」

「何でもないってさ…何だったんだろうな」

魚の間には特に変わったところはなく壁に立派な魚の絵が飾ってあるだけのよくある部屋だった。

「…普通の部屋だな」

「いいじゃない。質素な感じがして」

空は部屋の真ん中にあるテーブルの上にあったお菓子を一つ食べた。

「うん。おいしい」

につこりしながら空は二つ目をほおばった。

「なあ空、お前は何か文句とかないのか？」

「そりゃあ少しはあるわよ」

「じゃあさっき何で何も言わなかったんだよ」

「そつそれは…」

空はくちごもりながら顔を赤面させている。俺、なんか余計なことでも言ったかな？

「まあいいか。再会してからゆっくり話したことないからな」

「そうだね。今日はいろいろ話そつか“京矢”」

ん？キヨウヤ？

「あつ！ごつごめん！良介だよ良介。間違えちゃった」

別に名前を間違えられたただけなら特に気にはしなかったのだが、その時の空の表情はすごく暗く、悲しく見えた。まるで忘れていた何かを思い出したかのような…

「ごめん。本当に何でもないの」

「…お、おう」

「気に、しないで」

本日2度目の「気にしないで」はとても悲しい言い方だった。

それから俺と空は互いの中学生の頃の思い出話に花を咲かせた。時

に笑い、時に恥ずかしがり、時に怒った。

「そんな時ばかりは俺も恥ずかしくてさー」

「あはは！良介らしいかも！」

「うるせー。余計なお世話だよ！」

とは言うが俺も笑っていた。久しぶりにこんなに笑った気がする。

今度は私の番ね。と空が言うと、部屋の外から

「飯食いに行くぞー」

と麻弥の声が聞こえてきた。いつのまにか晩飯の時間になっていたようだ。俺は話に夢中で気付かなかった「もうそんな時間かー」

それはどうやら空も同じだったらしい。

「じゃ、行くか」

そうして部屋から二人で出た。今は空は笑顔だが俺はあの京矢と言

ったときの空の表情がどうしても頭からはなれなかった。部屋から出るときもう一度空を見た。その表情は再び暗くなっていた・・・。

旅館にてゝ魚の間々（後書き）

どうも！DOGGOONです！とっくの昔に夏休みは終わっているのに小説ではまだまだ夏休み始まったばかりですね！（爆）

旅館での話は全四話程度を予定しているのですがなかなか全体をとうしてのいい話を書けなくてですね・・・ずいぶん時間がかかってしまいました。

しかし、そのおかげでやりたいことが見つかりました。次はなるべく早く出したいと思っていますので・・・待っててください。それでは、今回も読んで頂き有難うございます。次も是非とも読んでください。

旅館にてゝ魚の間の夜ゝ（前書き）

「あのことだけど…」

「忘れたよ」

旅館にてゝ魚の間の夜

初日の晩飯は魚をふんだんに使った超豪勢なメニューだった。俺は鯛の尾頭付きなんて初めて食べた。もちろん他の料理も絶品だった。しかし、あまりにも量が多すぎたため、食べきることはできなかった。(残すと思いいみんな限界まで食べたのだが…)残りは旅館の職員さんたちと、麻弥のじいさん、ばあさんが食べるらしい。そのあとすぐ風呂に入った。風呂というより温泉だった。俺たち以外の客の姿はなく、貸し切り状態だった。

「ひゃっほー！誰もいねーじゃん！」

と、宮晴は腰に巻いていたタオルをとっぱらって駆け出した。

「…お前は子供か、宮晴」

「よし！俺、泳ぐ！」

ここにも子供が一人いた。「…どいつもこいつも」

俺は先に体を洗ってから入ることにした。

ごっ

「あでっ！」

…男の証明物を隠さない子供な高校生が、盛大にこけて頭を打った音が男湯に響き渡った。

「…あーきもちいー」

「まったくだー」

麻弥と宮晴がやっとおとなしく湯に浸かった。

「麻弥ー、良介ー、誘ってくれてありがとなー」

「なーに人数が足りなかったからお前を呼んだんだよ。な、良介？」

「じゃなきゃお前なんか誘わねーよ」

「うつわーひッでえー」

わはは、と男湯に今度は三人の笑い声が響いた。

「それはそうと、あの空ちゃんとか緋奈ちゃんとかさ、何であんなかわいい子ちゃんも一緒にきてるんだ？」

と宮晴が言った。

「緋奈は俺がつれてきたけど、この間まで入院してたからさ、全快祝いとしてな」

「空は…ちよつとわけがあつてだな…とにかく、やっぱり花がないと旅行も楽しくないだろ？」

と麻弥があわてながら言った。空のわけありが妙に気になった。が俺は何も聞かないことにした。

「…でいきなりだけどさー、良介が羨ましいよ、俺」

宮晴が俺を羨ましげにみていた。

「は？何が？」

「空ちゃんと部屋が一緒だつてことだよ」

「しかも二人つきり」

と麻弥が付け加えた。

「こつちはいいい迷惑だよ」

「…まさか知らなわけがないとは思っけど、空は学年でも三本指に入る女子だからな？」

麻弥が驚愕の新事実を言いやがった。

「あいつが！？そんなに可愛いか…？」

「ばっか！お前…」

麻弥が呆れながら俺を見る。

「…今俺はお前に殺意を抱いたよ」

と宮晴が言う。

「幼なじみだからってそいつあ鈍すぎるつてもんだ。見た瞬間可愛い！と宮晴は思っただろ？」

「おうよ、ビビビツときたよ」

「…何じゃそりゃ」

あーよく分かんねー…

「俺、そろそろあがるから」

体も十分暖まり、リラックスもできたので先にあがることにした。

「こらー逃げるなー」

「待てよー鈍感男ー」

俺は二人を無視して先にあがった。

部屋にもどると布団が二つ並んで敷いてあった。

「気持ち良かったよねー」

と、空がこちらを見ずに言った。奥の窓辺に向かって空は暗くなつた窓に自分を映し、しっとりと濡れた髪をとかしていた。普段は結んでいて降ろさない髪が、肩に真つすぐおりている。それを丁寧にくしでとかしている。ただそれだけなのに何だか妙に色っぽくて、どきつとした。

俺はそれを悟られないように空の後ろに歩み寄り、肩に手をついて「今日はどのようになさいますか？」

と美容師になりきることにした。

ちらつと窓に映る俺を見て少し笑ったあとに

「そうねー…カットはいいから髪をとかしてくれませんか？」

とのご要望があったのだがもちろんさっきのは

「…冗談だったんだけど」

というわけだったんだが…

「髪とかすぐらいやってくれてもいいでしょー？」

空にくしを押しつけられてしまった。

「…少しだけだぞ？」

俺は空の髪をくしでとかし始めた。

「…なあもういいか？」

窓に映る空を見ながら言った。少しって言うときながら、空がもう少し、あと少し、と延長し続けたため、かれこれ二十分も過ぎている。

「んー、あと三分」

「…了解」

もー三分ね…ウルトラマンが活動できなくなる時間だなー…とか考えていると

「ねえ良介」

「ん？」

「プリント持ってきてくれたときのことだけどさ…」

いゝっ…何でいきなり…

「お、おうあの時か…」

夏祭りの次の日のことだが…空に好きだと言われたあの日…

「…あの時のさ」

と言って空が窓に映る俺を見る。

かああ、と音が聞こえてきそうなくらいの勢いで空は顔を赤らめた。

…きつとそれは俺もだったと思うけど。

「あの時のこと…」

「覚えてないぞ」

と空が言う前に俺は答えていた。

「え…」

「あの時のことは忘れたよ…っーかお前が忘れてって言ったんだろ？」

「それは、そうだけど…」

「もう…忘れたよ」

本当に忘れることなんかできないけど。忘れたくても忘れられないけど。

「そっ…なんだ」

と空が小声でつぶやく。

「そうだよ…よし、これで終わり」

俺は空の頭に「ぼん」と手を置き、

「これにて今日の営業時間は終わりになります」

と、おどけた感じで言った。しかし、空は笑わない。窓に映っている空はうつむいていて表情は見えない。

「そろそろ寝ようか」

と、俺は言ったが空は頷くだけだった…

旅館にてゝ魚の間の夜ゝ（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます！

旅館編は四話です。とか言っておきながらもつと長くなりそうです。

（ゝ・ω・ゝ）だつて書いてる途中で書きたいことどんどん増えるんだもん！というわけ（？）で楽しみください。次回は空の中学生時代の過去が明らかに…ではこの辺で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1673a/>

eyes on me

2010年10月8日21時33分発行